

日本の夏の風物詩「花火」

そのルーツは古く、紀元前3世紀の古代中国、火薬の基となる硝石が発見されたからと言われていたが、日本での歴史上の記録と残る花火第1号は

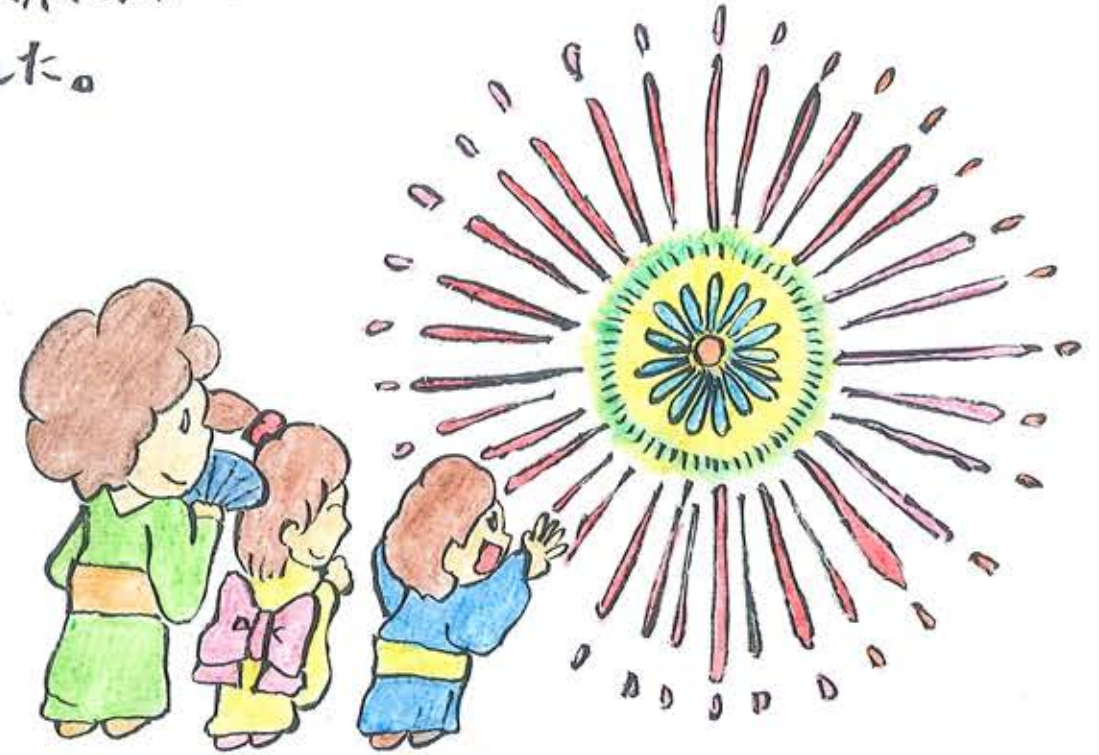


それから約2000年後の天正17年(1589年)7月伊達正宗が観賞しるのが最初であるとも云われ、それに慶長18年(1613年)8月駿府で徳川家康に英国人ジョンセーヌが同行の中国人の手で花火を見せたという記録もあります。

万治2年(1659年)大和の国(現奈良県)から江戸へ出てきた弥兵衛(初代鍵屋)が葦の管の中に火薬を入れた初歩的なおもち花火を

考案し売り出し江戸庶民に爆発的な人気を得たと言われます。当時江戸に興隆してきた町人文化を支えられてきた花火人気は衰えることなく江戸のほか花火に相当盛んであった地方は三河直叢、信州、越後、九州と言われていました。

花火の人気と共に江戸幕府は花火の種類や火薬の量、使用場所や製造業者を指定したりして、安全対策を指示したようです。当時の江戸では、防火対策として広小路をもうけたり川の兩岸に火除地をつくらせて、今日でいう防火ベルトをもうけていました。



明治のはじめ頃、西洋からの輸入により、塩素酸カルウムやスロニウム、バリウムなどの彩色光剤を得て、日本花火の歴史上最大の躍進の時期を迎え、今日の世界一といわれる日本花火の基礎がつけられました。